

死海でビールを味わう⑥

近藤 節夫 (エッセイスト)

中東イスラエルとヨルダンの国境沿いにある死海は、海拔マイナス430mの低地にあり、空想的ともいえる「身体が水中に浮く海水湖」の言葉に惹かれて、海外からも多くの観光客が入水体験をしようと訪れる人気の観光スポットである。その人気の秘密は、死海の塩分の含有量が普通の海に比べて飛びぬけて濃いために、水に浸かれば自然に身体が浮くといわれ、実際に水中で自然に浮く実感を味わいたいと神秘的な魅力に誘われるからである。

実際10余年前に死海を訪れ、沿岸のホテルに滞在して死海に浸かってみた。事前にホテル支配人から「30分以上は入水しないように」と釘を刺された。更に「陸へ上がったら、しっかりシャワーで身体を丁寧に洗うよう」アドバイスもされた。その上「その日はアルコール類は飲まない方がよい」との忠告までもらった。

早速着替えて期待と不安を感じながらゴム草履を履いて恐る恐る死海に入水してみると、確かに言う

おそらく100m競泳レースをやっても、それと真水のプールの1,500mの記録とどっちが上回るだろうかと思っただけである。

ただ、空を仰いでじっと浮いているだけなら、それほど疲れることもない。本を上に掲げて読んでいる人もいた。身体が浮く最大の原因は、死海の塩分



塩分の濃い死海で手足を伸ばして浮いている近藤さん

に言われぬ不思議な感覚に捉われたが、身体は本当に自然のまま浮いた。しかし、自分の身体が軽く感じたというわけではなく、海水の魔力によって無意識に浮かされたような妙な感覚である。水中ではなぜか自由に手足を動かすにくいのだ。海水自体も普通の水とは異なりクセがあるように感じた。実際クロールで泳ごうとしても手を水中から外へ出しにくくて思うように泳げない。中々前へ進まないのだ。

濃度が30%で普通の海水の10倍も濃いことにある。この濃度だと5合の海水を飲んだだけで致死量に達し、たちまち死に至るから怖い。海水は極力飲まないようにと注意されたが、どうしても少しは口内へ入ってしまう。こればかりは塩っ辛くてとても我慢できない。